

相模野旧石器時代研究の現在とこれから

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

2018年は、「野川・月見野以前以後」と学史的な画期に位置づけられる神奈川県大和市の月見野遺跡群が発見されてから50年という節目の年である。神奈川県内における旧石器時代遺跡は、相模川東岸に広がる相模野台地を中心に発見例が増大し続け、現在その数は500箇所を超える。相模野台地は火山灰の供給源に近く層位的に恵まれており、石器群の変遷を検討するのに良好な地域である。この地の利を活用した相模野編年は、県内のみならず列島地域の石器編年の要として、重要な位置を占めてきた。

近年、新東名や国道246号線厚木秦野道路建設事業など大規模道路開発に伴う発掘調査事例の増加に伴い、神奈川県西部地域において旧石器時代の調査事例が増加している。そこで今回は、増え続ける旧石器時代資料の把握に向けて、県内における旧石器時代研究の礎となってきた相模野編年を再確認することにより今後の指針とすることを目的に本テーマを設定した。

(畠中俊明)

1. 研究史

日本の旧石器時代研究は、1949年に行われた群馬県岩宿遺跡の発掘調査を契機として本格的に開始され、本県での調査・研究が開始されたのは1952年以降のことである。以下、相模野台地を中心とした県内の旧石器時代研究・調査の歩みを辿ることにしたい。

県内において、最初に人類活動の痕跡を示す遺跡が確認されたのは1952年であり、鎌倉市栗船山遺跡での黒曜石製剥片の発見(吉崎 1954)と、相模原市南区下溝古山等のローム層断面に露出した礫の確認である。特に、後者は、地形・地質学研究者の戸谷洋が関東ロームの露頭調査で発見したもので、人類の活動面がローム層中に複数存在することと、暗色帶の対比から他地域とのロームの対比や出土石器の比較が可能なことを予測しており、その後の相模野台地での旧石器時代研究の方向性を暗示している(戸谷・貝塚 1956)。

考古学研究者による発掘調査は、1957に行われた横浜市瀬谷区本郷遺跡の調査が最初で、個人住宅の建設に際して発見された遺跡の小規模な調査であった(和島 1958)。研究初期の発掘調査としては、その後、1961年の箱根町朝日遺跡(坂詰 1967)、1963年の相模原市中央区塩田遺跡(岡本 1964)と藤沢市稻荷台地遺跡群S地点(小田 1965)があり、朝日遺跡と稻荷台地S地点ではナイフ形石器、塩田遺跡では細石器の出土が報告された。また、その後の相模野台地の調査・研究に大きな影響を与えた調査として、岡本勇と松沢亜生が1960年から行った相模野台地中・北部の遺跡分布調査(岡本・松沢 1965)がある。岡本等は、戸谷の調査結果に影響を受け、考古学の立場から相模原市内～大和市北部の各河川流域において関東ロームの露頭調査を行い42遺跡を発見した。そしてローム層中の石器出土深度(層位)から石器の編年研究の可能性を指摘した。塩田遺跡の発掘調査は、この分布調査で発見された遺跡の内容を明らかにするのが目的であった。岡本等の調査は、その後に行われた相模考古学研究会の遺跡分布調査に大きな影響を与えた。相模考古学研究会は、1968年2月から組織的に継続して遺跡分布調査を行い、相模野台地全域と多摩丘陵の一部を含め170遺跡を発見・確認した。そして、ナイフ形石器や槍先形尖頭器等のおもな石器の出土層位と、関東ローム層序の

中で遺跡数の増減や礫群の消長などを明らかにした(相模考古学研究会 1971、小野 1979)。明治大学が発掘調査を行った大和市月見野遺跡群と綾瀬市上土棚遺跡はこの遺跡分布調査で発見された遺跡である。1968・1969年に行われた月見野遺跡群の発掘調査は、4遺跡10地点に及び、ローム層最上層からA T直上(当時はまだA Tは確認されていない)までの各層位から石器群が出土した。そして、出土層位に基づく石器群の編年研究や、石器の集中する「ブロック」と礫群などの分布から遺跡の構造研究の可能性を提示した(明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団 1969)。しかし、月見野遺跡群の調査成果は、概報が発表されただけで正式な報告書は未だに刊行されていない。なお、月見野遺跡群は、相模考古学研究会により発見される前年に、酒井仁夫・松浦宥一郎によって発見されており、採集した石器が報告されている(酒井・松浦 1968)。また、相模考古学研究会は、その後、相模野No.149遺跡(大和市教委 1989)・小園前畠遺跡(綾瀬町教委 1972)・地蔵坂遺跡(綾瀬町教委 1974)・報恩寺遺跡(鈴木・矢島 1979)の発掘調査を行い、遺跡分布調査や月見野遺跡群調査の成果なども踏まえ、相模野台地の石器群を出土層位に基づき第Ⅰ期～第Ⅴ期に区分し、第四紀の環境変動の中で人類活動の変遷を捉えようとした相模野編年を提示した(相模考古学研究会 1972、矢島・鈴木 1976)。

1970年代後半になると、相模考古学研究会による遺跡分布調査と月見野遺跡群などの発掘調査成果が行政内でも周知されて開発事業に伴う発掘調査に旧石器時代遺跡も加えられるようになり、綾瀬市寺尾遺跡(神奈川県教委 1979)と大和市上和田城山遺跡(大和市教委 1979)の発掘調査を嚆矢として大規模な行政発掘が相次いで行われるようになった。そして、こうした発掘調査で蓄積された成果をもとに、石器群の変遷を12段階に細区分した相模野段階編年が発表された(諏訪間 1988)。また、神奈川県内外の旧石器時代遺跡の発掘調査に従事する行政内研究者を中心とした研究活動も活発に行われるようになった。1979・1982年には神奈川考古同人会によるシンポジウムが開催され、1989年に発足した石器文化研究会の研究活動に引き継がれた。さらに、1994年には、神奈川県立埋蔵文化財センター及びかながわ考古学財団職員による共同研究が開始され、財団職員によって今日も継続している。

(鈴木次郎)

表1 相模野台地等の旧石器研究・発掘の歩み

年 月	調 査・論文等	調査者(報告者)	文 献	
1905	酒匂川・早川流域の調査で旧石器状の角礫を採集	N. G. マンロー	1911	Prehistoric Japan
1939	横浜市港北区日吉等の砂礫層から発見した骨角器(?)等を報告	永沢譲次	1939	史学 18-1
1949	岩宿遺跡の発掘調査	明治大学	1956	明大文学部研究報告 1
1952	鎌倉市粟船山遺跡から黒曜石製石器を採集	吉崎昌一	1954	貝塚 49
1952	相模原市南区下溝古山・下原で礫群を発見	戸谷 洋・貝塚爽平	1956	地理学評論 29-6
1954	横浜市都筑区東方町中村で黒曜石製石器を発見	坂詰秀一	1954	銅鐸 10
1957	横浜市瀬谷区本郷遺跡の発掘調査	和島誠一(岡本 勇)	1958	横浜市史 1巻
	横浜市神奈川区羽沢町東泉寺付近の礫群発見を紹介	和島誠一(岡本 勇)	1958	横浜市史 1巻
1960～	相模野台地中・北部の遺跡分布調査	岡本 勇・松沢亜生	1965	物質文化 6
1961. 11	箱根町芦ノ湯朝日遺跡の発掘調査	坂詰秀一	1967	箱根町誌 1巻
1963. 3	相模原市中央区田名塩田遺跡の発掘調査	岡本 勇	1964	相模原市史 1
1963. 8	藤沢市稻荷台地S地点の発掘調査	小田静夫	1965	藤沢市調査報告書 2
1967. 6	大和市下鶴間(月見野第II遺跡)で石器を採集	酒井仁夫・松浦宥一郎	1968	大塚考古 9
68. 2～'70	相模野台地の遺跡分布調査	相模考古学研究会	1971	遺跡分布調査報告書
		小野正敏	1979	日本考古学を学ぶ(3)
1968. 3	大和市下草柳大下遺跡の発掘(礫群を調査)	明治大学	1971	遺跡分布調査報告書
1968. 8-9	大和市月見野遺跡群の発掘調査	明治大学	1969	概報 月見野遺跡群
1968. 12	綾瀬市上土棚遺跡の試掘調査	明治大学		

年 月	調 査・論文等	調査者(報告者)	文 献	
1969. 2	綾瀬市上土棚遺跡の発掘調査	明治大学		
1969. 2	綾瀬市寺尾代官遺跡の発掘調査	明治大学	1991	明大博物館館報 6
1969. 4	大和市月見野遺跡群の第2次発掘調査	明治大学		
1970. 2	大和市相模野No.149遺跡の発掘調査	相模考古学研究会	1989	大和市調査報告書 34
1970. 12	海老名市上今泉谷遺跡の発掘調査	渡辺 熱	1971	海老名市教委の概報
1971. 8	綾瀬市小園前畠遺跡の発掘調査(相模野編年の骨格提示)	相模考古学研究会	1972	綾瀬町調査報告書 1
72. 3-'73. 12	綾瀬市地蔵坂遺跡の第1~3次発掘調査	相模考古学研究会	1974	綾瀬町調査報告書 2
1975. 3	綾瀬市報恩寺遺跡の発掘調査	相模考古学研究会	1979	神奈川考古 6
1976. 5	相模野編年の提示	矢島國雄・鈴木次郎	1976	神奈川考古 1
1976. 6	広域火山灰ATの発見	町田 洋・新井房夫	1976	科学 46-6
1977. 7-12	綾瀬市寺尾遺跡の発掘調査(大規模な行政発掘の開始)	神奈川県教育委員会	1979	県埋文調査報告 18
79. 4-'80. 3	大和市上和田城山遺跡の発掘調査(〃)	大和市教育委員会	1979	大和市調査報告書 2
1979. 12	神奈川考古第1回シンポジウム	神奈川考古同人会	1979 1980	神奈川考古 7 神奈川考古 8
1982. 11	神奈川考古第2回シンポジウム	神奈川考古同人会	1983	神奈川考古 16
1988	相模野段階編年の提示	諫訪間順	1988	神奈川考古 24
1989	石器文化研究会発足(1985)研究集会「AT降灰以前の石器文化」	石器文化研究会	1989	石器文化研究 1
1990-1994	綾瀬市吉岡遺跡群の発掘調査《B5層から最古の石器群出土》	かながわ考古学財団	1996	財団調査報告 7
1994	旧石器時代研究プロジェクトによる共同研究の開始	かながわ考古学財団	1994-	かながわの考古学
1997. 5	用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土炭化材に関するセミナー	かながわ考古学財団	1998	同記録集
1997	相模原市中央区田名向原遺跡の発掘調査《住居状遺構を発見》	同遺跡群発掘調査団	2003	相模原市調査報告 30
2001	考古学講座「相模野旧石器編年の到達点」	神奈川県考古学会	2001	考古学講座予稿集
2002	吉岡遺跡群と用田鳥居原遺跡の遺跡間接合の発見	かながわ考古学財団	2002	財団調査報告 128, 153
2003. 12	日本旧石器学会設立	日本旧石器学会	2003	旧石器研究 創刊
2010. 5	日本旧石器時代遺跡のデータベース作成・刊行	日本旧石器学会	2010	日本列島の旧石器時代遺跡

2. 相模野第Ⅰ期

日本列島における人類の痕跡は、加速器質量分析(AMS:Accelerator Mass Spectrometry)を用いた放射性炭素年代測定法による較正年代は今から38,000年前(中村2014)を遡ることのない測定年代値に始まる。

列島内の最古級の石器群は、熊本県石の本遺跡8区下層・沈目遺跡VIIb層、静岡県井出丸山遺跡第1文化層・富士石遺跡第1文化層、東京都西ノ台遺跡X層・中山谷遺跡X層・鈴木遺跡御幸第一地点第IV文化層・武藏台遺跡X層、千葉県草刈遺跡C区第1文化層など列島の旧石器時代の遺跡文化層数全体からみれば0.1%の遺跡出土数にも及ばないが、それだけに貴重な遺跡である。神奈川県下では綾瀬市吉岡遺跡群D区第5黒色帶(以下B5層)出土資料(白石・加藤編1996以下報文)が第1期唯一最古級の石器群である。

相模川支流の目久尻川左岸の座間丘陵樹枝状谷頭の東端標高39m前後のD区では、6ヶ所の集中地点から100点を出土した。出土層序は相模野第2スコリア(以下S2S)の上位(Y-103)と下位(Y-100・99)に挟まれた、地下水による酸化還元グライ化した「緻密な砂質混じりの層」の青灰色土層である。出土資料の91点がチャート製で、その他は凝灰岩系と頁岩系であり、風化の極めて乏しい信州系黒曜石製剥片1点が出土している。

なお、B5層上面出土として刊行された大和市No.159遺跡第II文化層(村澤編1996)は、その後報告者によつてB4層下部と訂正されている。L5とされた「明るい層」は近隣の層厚比較からB4層間層明色帶である。

また、大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡(麻生編2008)では、B5層下部(S2S直上)採取の微細炭化物によって相模野台地では最も古いAMS年代が測定されている。補正年代は32,620±170BP(IAAA-62325)であり、較正年代をIntCal13で変換すると、37,100-36,090 calBP(範囲は 2σ :95.4%、一の位は四捨五入 以下同)、中央値で36,600 calBPを測る。また、樹種は針葉樹のトウヒ属を同定している。

吉岡遺跡群D区B5層出土石器は、層理面で剥離した分割剥片の突端部や一部に数回の浅い調整加工や、剥片縁辺に刃こぼれが観察されるなど、厚みのある矩形小形剥片を素材とする石器群である。剥片剥離工程は粗雑で、剥片類は蝶番剥離や折損、打瘤裂痕が器体全体に及ぶなどの裂片や転礫を含む。なお、横長剥片素材の端部加工痕(報文第20図23)を「裏面鋸歯状石器」(竹岡2005)とすれば、石の本・沈目両遺跡の朝鮮系「鋸歯縁石器群」(長井2016)の拡散現象も可能となろうか。ただし、珪質頁岩製の単剥離单設打面石核から三枚以上の連続剥離痕を有する基部側縦長剥片(第1図7)は本石器群においては一際特異である。

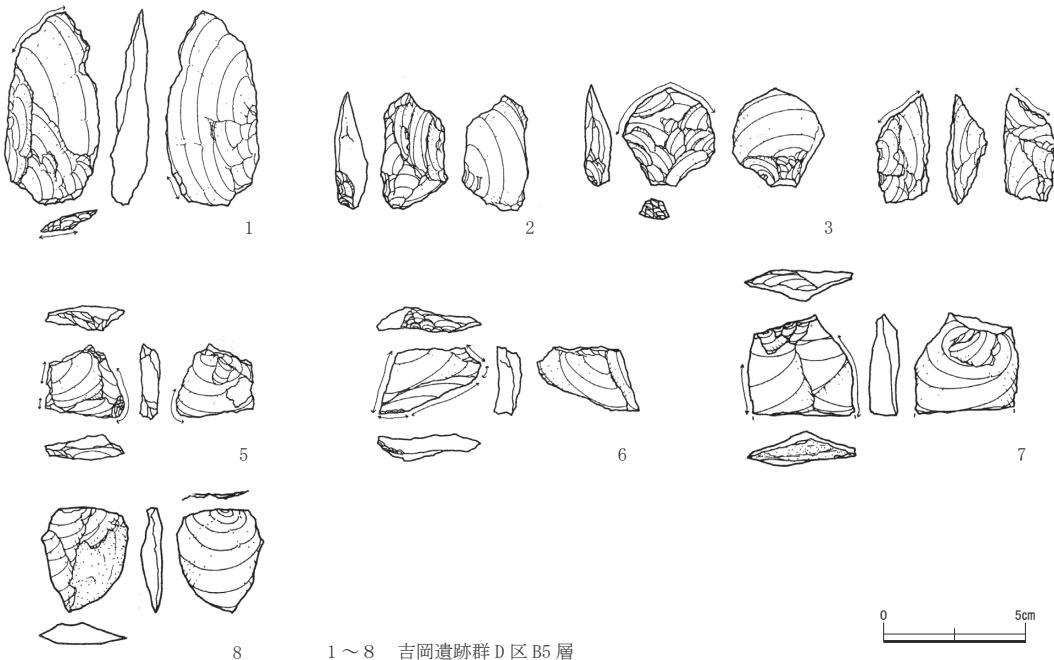
なお、チャート製小形剥片石器群は武藏野台地の西ノ台・中山谷・鈴木遺跡御幸第一地点の石器群と頗る共通し、Xb層上下にS2Sの上下層を検出するとB5層石器群とXb層石器群の層序的同時期性を示そう。

また、愛鷹山麓最下層の井出丸山遺跡第1文化層(高尾・原田編2011)は、浸食した開析谷を臨む丘陵上にあり、吉岡D区B5層と共通する。なお、6点の炭化物のAMS測定補正年代(IAAA-63169~63174)は、IntCal13で変換した中央値は37,210calBPを測定する。また、樹種は落葉広葉樹のタラノキとエノキ属を同定している。

石器群は両設打面や打面転位石核から横長・縦長剥片を剥離する整然とした剥片剥離工程の小形剥片石器群である。吉岡・西ノ台・中山谷・鈴木御幸第一地点のチャート製小形剥片石器群と時期的共通性があるものの、石斧所持の石器群との近似性が異なる。また、90%以上の在地産ホルンフェルス製を占めるが、南海上の神津島恩馳島、北山間の和田鷹山・蓼科冷山産黒曜石産地へ直線110km、北東150kmの湯ヶ峰産下呂石などの遠隔地ブランド石材を補完する点は南関東のチャート製小形剥片石器群の石材環境と極端に異なる。

第1期石器群は列島規模での器種・石材組成にバラツキがあり、第2期前半以降の統一的な時期変遷とは異なる地域的モザイクを呈する。38,000年前を遡る具体的かつ確実な石器群が未検出な現在、異集団の到来と交代(仲田2016)を思考するなど、中期・前期旧石器時代の否定・中庸・肯定の議論は継続しよう。

(砂田佳弘)



第1図 相模野第I期の石器

3. 相模野第Ⅱ期

相模野台地は南関東地域で火山灰の供給源に近いためローム層の堆積が厚く、層位区分の解像度は高く石器群の変遷を検討するのに良好な地域である。一方、ローム層の堆積が厚いため相模野第Ⅰ・Ⅱ期の調査事例は武藏野台地等と比べて少なく、後期旧石器時代後半期は相模野台地、前半期は武藏野台地の調査成果から議論される場合が多い。

1988年に諏訪間によって、それまでの調査成果を基に石器群を12段階に区分した。この相模野段階（編年）は、相模野V期区分を層位的に細分し石器群の変遷を捉えたものとして、他地域の石器群を細分する際の基準となっている。相模野第Ⅱ期は、相模野段階では段階Ⅱ～IVに細分されている。なお、段階区分と層位の関係は、2010年の『講座日本の考古学1』の諏訪間論文に従った。

段階Ⅱ L5上部～B4層上面を出土層位とする。本層位は吉岡遺跡群基本層位において層厚が1mを超えており、B4層は間層を挟んで上・中・下に細分されている。大和配水地内遺跡第XIV文化層、栗原中丸遺跡第IX文化層のL5層、吉岡遺跡群D区B4層下部、吉岡遺跡群C区B4層中部、吉岡遺跡群D区B4層上部、津久井城跡馬込地区第6文化層のB4層石器群が幾つかの時期区分で捉えられる可能性が高い。

B4層中部～L4層では、ガラス質黒色安山岩を主石材とし黒曜石が一定量用いられている。石器はナイフ状石器、台形様石器、楔形石器等がみられ、局部磨製石斧が検出されている。また、大和配水地内遺跡第XIV文化層は基部加工のナイフ形石器が出土しており、台形様石器は検出されていない。

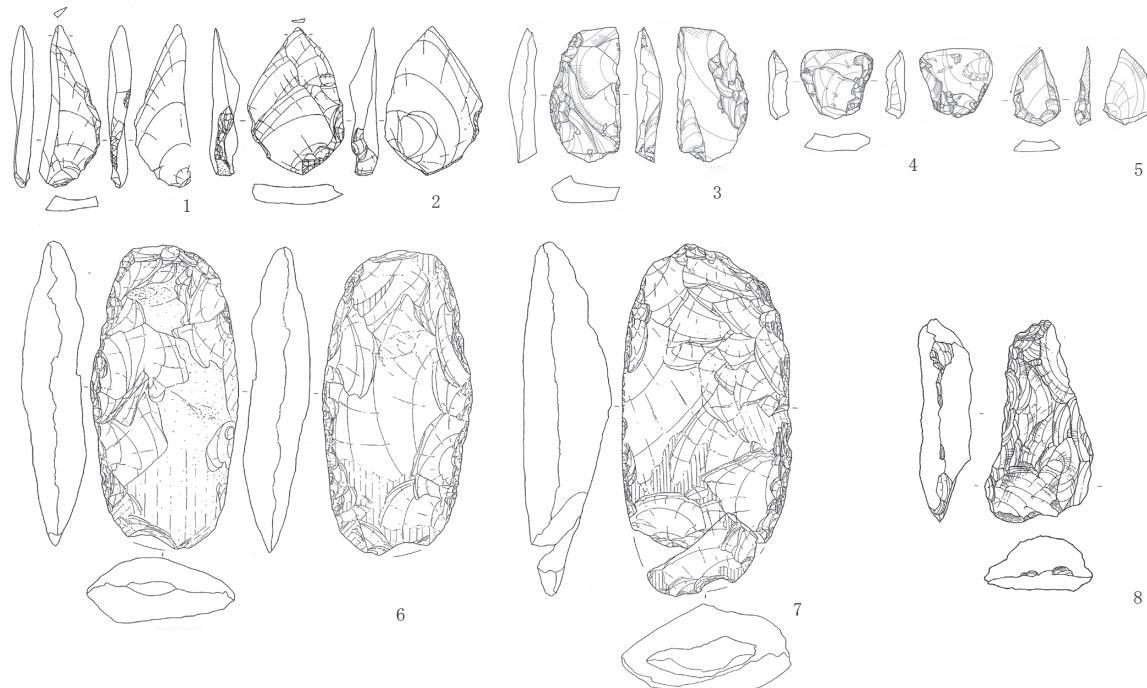
B4層上部は、ガラス質黒色安山岩が主石材として用いられ、ナイフ形石器が主体を占め台形様石器は出土していない。斧形石器は打製石斧である。以上石器群の様相が、B4層の中部と上部で変わっており、少なくとも2時期に区分される可能性もある。なお、二側縁加工の茂呂系ナイフ形石器の存在が不明確であること、台形様石器や石斧が主たる器種組成であり、その後の石器群とは大きく一線を画すことなどから、ここまで石器群を相模野第Ⅰ期と捉える考え方もある。

段階Ⅲ B3層下部～中部を出土層位とする。遺跡数は少なく資料的制約があるが、黒曜石の使用頻度が高くなっている。上和田城山遺跡4次第Ⅲ文化層のB3～L4層、吉岡遺跡群C区B3下部、地蔵坂遺跡第VII文化層が相当する。上和田城山遺跡では厚手の縦長薄片を素材に二側縁加工のナイフ形石器が検出されている。調整加工は交互剥離が施されており、武藏野台地第VII文化層のナイフ形石器と共に通性がみられる。本段階になると斧形石器は検出されていない。

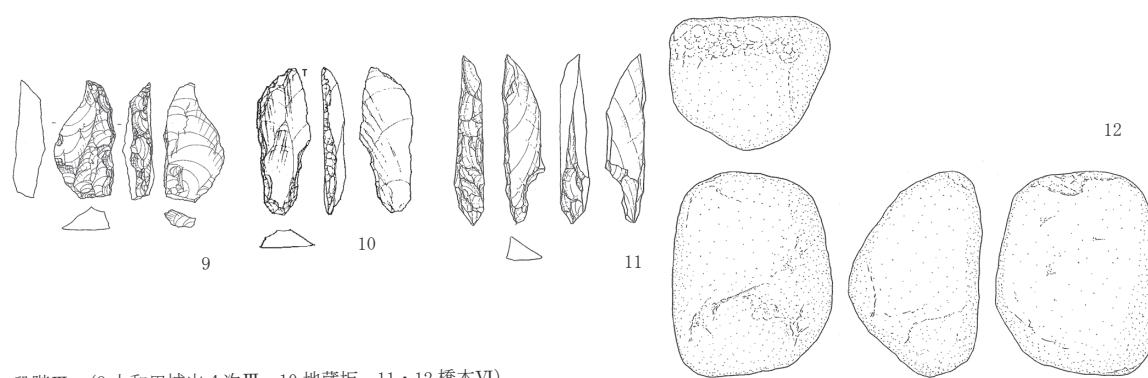
段階Ⅳ B3層上部～B2層下部を出土層位とする。L3層中のS1S（相模第1スコリア）直下にAT降灰層が含まれる。神奈川の旧石器時代研究の画期となった寺尾遺跡第VI文化層、藤沢校地内遺跡第VI文化層、第V文化層、大和配水地内遺跡第X文化層が挙げられる。寺尾遺跡第VI文化層は鈴木遺跡第VI層と合わせて武藏野第VI層石器群（寺尾期）の基準資料である。信州産黒曜石を主に用いて、二側縁加工のナイフ形石器を多数出土している。剥片剥離は真正の石刃技法が用いられ多量の石刃が伴っている。

本段階は、AT降灰層を挟んだ上下の黒色帯を含んでおり、武藏野台地の時期区分と異なる。B2層は武藏野台地の第1黒色帯に対比されることから、武藏野第V～IV層下部段階の第V層下部を含むことになる。武藏野第V～IV層下部の捉え方も一律ではなく、第V層石器群と第IV層下部石器群の違いよりも第V層石器群と第VI層石器群の方が近いとする考え方もある。その意味では、B2層下部を取り込む形で段階Ⅳを設定するのも一つの捉え方であるが、AT降灰層をもって後期旧石器時代を前半と後半に大別するのであれば、B2層下部の石器群を前期と後期の移行期に置くほうが分かりやすい。

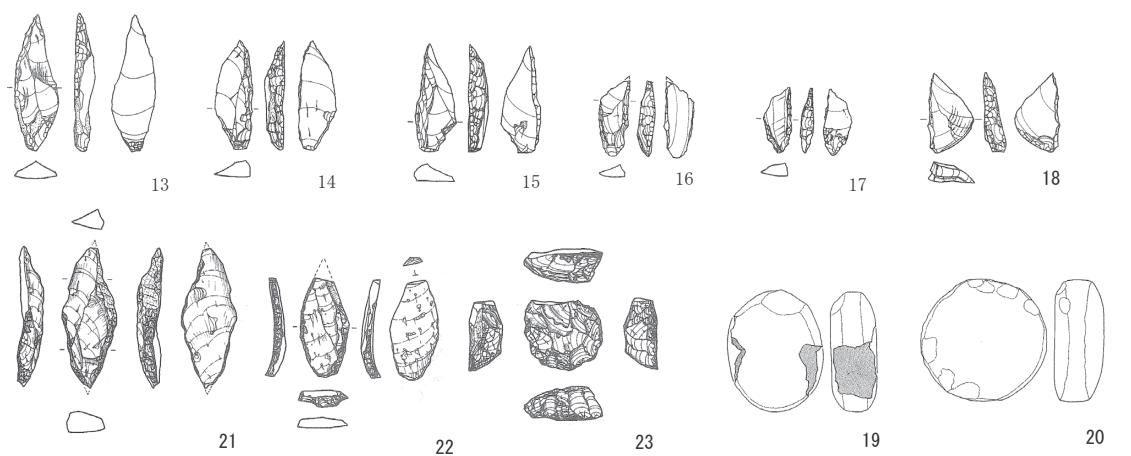
（西井幸雄 畠中俊明）



段階II (1・2・6・7 大和配水池内XIV、
3～5 津久井城跡馬込地区6、8 吉岡遺跡群D区B4)



段階III (9 上和田城山4次III、10 地蔵坂、11・12 橋本VI)



段階IV (13～20 寺尾VI、21～23 慶應湘南キャンパスV)



第2図 相模野第II期の主な石器

4. 相模野第Ⅲ期

「第Ⅲ期」は、矢島国雄・鈴木次郎によりB2UからB2L上部（B2L層下部を除いたB2層全層）に生活面を持つ石器群とされ、基部加工と切出形のナイフ形石器、尖頭器様石器（角錐状石器）、母指状搔器、鋸歯状の調整加工を施した削器を特徴的な石器として設定された（第3図 矢島・鈴木1976、1978）。その後、層位的出土例の検討によって石器群の段階的把握を行った諏訪間順によって「段階V」に設定された（諏訪間1988、2001）。諏訪間は、層位的範囲をB2L下部からB2Uまでとしており、矢島・鈴木が設定した層位的範囲とは若干の違いはあるものの、両編年は概ね合致し、支持されている。

これに対し、織笠昭は、その後に発見された資料の内容を含めて本時期の石器群を再検討し、本時期の層位的範囲をB2L底部からL2下部付近と位置付け、矢島・鈴木、諏訪間に比べ、本時期の編年的範囲を広範に捉え直した（織笠1987、2001など）。この差異が顕著に認められるのが、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス遺跡第V文化層の石器群の評価である（第2図21～23）。鈴木はこれらを第Ⅱ期（段階IV）に帰属させ、後続する石器群を特徴付ける石器の出土が見られることから、第Ⅲ期への移行期的な様相としている（鈴木2001）。一方、織笠はナイフ形石器の形式的特徴やスクレイパー、石材のあり方から第Ⅲ期と位置付けている（織笠2001など）。諏訪間は織笠が捉えている該期の層位的範囲と近いが、二側縁加工ナイフ形石器と石刃・縦長剥片剥離技術の強固な関係性を保持していることから、鈴木と同様に前段階の所産としている（諏訪間1996など）。服部隆博、栗原等は、第Ⅱ期と第Ⅲ期の移行期的な資料と捉えているが、栗原等は敢て位置付けるなら、使用石材の主体が第Ⅱ期に特徴的な信州系黒曜石から第Ⅲ期に特徴的な箱根畠宿産黒曜石に変化していることから、石材獲得上の社会的システムが既に新たな段階に入っていると捉え、本石器群は第Ⅲ期の初期の石器群と位置付けています。いずれにせよ、前段階との構造的関連性を顕著に観察できる石器群と位置付けられよう。本遺跡の発見により、第Ⅲ期の石器群が前段階の石器群と決して断絶的な関係にあるのではないということは明確になったと考えられよう。

次に剥片剥離技術の変化と広域編年を検討する上で重要な要素について紹介する。本時期の石器群は、前後の時期が石刃技法を技術基盤とした石器群であるに対し、横長・幅広剥片剥離技術の基盤とした石器群である。この技術を用いて作出される代表的な器種の一つに国府型（系）ナイフ形石器が存在する。国府型（系）ナイフ形石器の発見例は、数量的には少量ではあるものの、海老名市の柏台長ヲサ遺跡など本時期の石器群の中に組成することは各遺跡の出土状況から明らかであり、本時期の石器群の広域な編年的位置付けを考える上で極めて重要な資料と捉えられる（第3図4）。

近年、当財団の旧石器時代研究プロジェクトチームが神奈川県内の国府系ナイフ形石器の集成を行い、7遺跡11文化層21点の資料を抽出した。しかし、明確な瀬戸内技法を有した資料は、本県では今のところ見つかっていない（鈴木、畠中・三瓶・大塚ほか 2016）。この傾向は、南関東地域全体に共通しており、国府型ナイフ形石器製作に適した石材が供給されにくい地域との指摘もある（会田1994）。石器製作に適さない環境下での当該石器の出土には、製品の搬入や有底横長剥片製ナイフ形石器の生産等の類似技術の登場（橋本2017）が考えられる。後者については、県内の遺跡において横剥ぎ石核が認められることから、類似技術の存在は確実と考えられる。

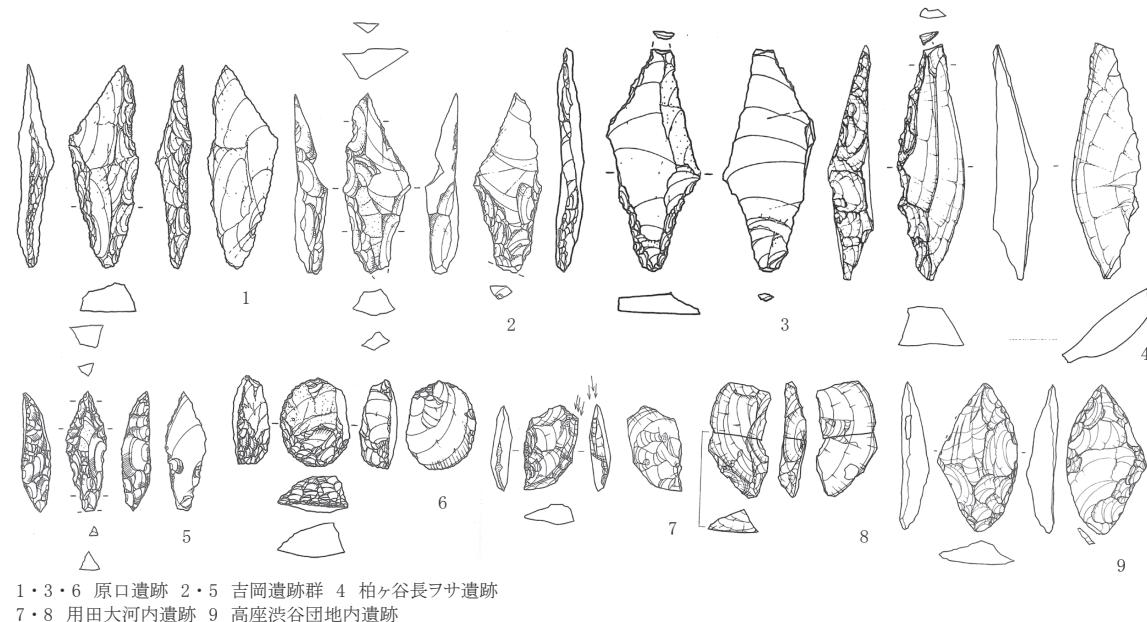
本時期の遺跡数は、本県の各時期の石器群の中でも最も多く100箇所以上の存在が確認されている。関東地方というエリアまで視点を広げてみると、この時期の石器群は北関東エリアの遺跡数は減少し、代わって南関東エリアでの遺跡数が集中することが分かっている。これらを北関東からの集団の南下・移住とする考

え方もあるが、前段階の立川ローム層VI層段階から遺跡数の減少は始まっており、遺跡数の増加要因が北関東エリ亞からの南下・移住とは限らないとの見解もある（関口2008）。また、北関東エリ亞から南関東エリ亞への製品の南下が確認されていないという指摘もあり（橋本2017）、必ずしも本時期の遺跡数の増加が、北関東エリ亞からの人々の南下・移住とは限定出来ない様である。

本時期の石器群のもう1つの大きな特徴としては、礫群の多さが指摘される。ほぼ全ての遺跡で検出されるというくらい、各遺跡から普遍的に検出される。また、礫群とは異なるが、磨石の出土状態も特徴的なものが確認され、一定の範囲内に磨石のみがまとめて出土するという状態もこの時期の特徴である。

続く第IV期・段階VIの石器群は、再び石刃等の縦長剥片剥離技術を主体とした石器群が登場する。また、これと併せ、槍先形尖頭器が出現する。しかし、その萌芽は本段階に既に確認されている。大和市の県営高座渋谷団地内遺跡では、B2層上部から本時期の石器群と共に安山岩・黒曜石製の槍先形尖頭器が出土している。上層のL2層からは大和市No.210遺跡や藤沢市の用田鳥居前遺跡から槍先形尖頭器の出土が確認されており、槍先形尖頭器の出現・使用石材・出土層位等を総合的に観察すると、第III期・段階Vの石器群は、後続する石器群にも段階的に推移していったと考えられるのではないか（第3図9）。

第III期・段階Vの石器群は、前後の石器群と技術的な断絶があったように見られがちであるが、それを繋ぐ石器群の存在が前後で確認されており、決して突然変異的に現れた石器群ではないと位置付けられよう。但し、遺跡数の増加や石器形態・使用石材の変化から、当時の人々のライフスタイルに大きな変化が生じたことは否定できない。近年、新東名高速道路の建設により、これまで旧石器時代の遺跡の発見例が極めて少なかった相模川以西地域からも本時期の石器群の存在が確認されている。西部に行くほど層位の堆積は厚くなり、相模野台地と同様な規模でB2層までの調査を行うことは極めて困難であるが、新たなフィールドとして細々とながらもデータの蓄積が進んでいる。当時の人々のライフスタイルの変化を総合的に把握し、相模野台地を中心とした本県の当該期の石器群の評価を再構築するためには、相模川以西出土資料との比較・検討は重要な作業であり、今後の本県の旧石器時代研究に欠かせない視点であろう。（脇 幸生・栗原伸好）



第3図 相模野編年第III期の主な石器

5. 相模野第IV期

相模野編年案が発表された当初、相模野第IV期は、L 2層およびB 1層から出土する石器群をまとめて捉え、ナイフ形石器を主体とする石器群に槍先形尖頭器が一部加わるものとして設定された。石器製作技法は、砂川型刃器技法に代表される石刃を大量生産する技術を特徴とし、こうした技法から作出される石刃を元にした茂呂型ナイフ形石器が特徴の一つとして挙げられる。ただし、第IV期にみられるようになる槍先形尖頭器は石刃との関わりは薄いと判断された。

その後の出土事例の増加や研究の進展も相まって、相模野第IV期は、B 1層中～L 2層に生活面をもつ前半とB 1層上部～上面に生活面をもつ後半とに細分された。IV期前半は発達した石刃技法と石刃を用いたナイフ形石器、槍先形尖頭器は数こそ少ないが、先端にファシット状の剥離痕を持つものが特徴的に見られるとしている。いわゆる有樋尖頭器である。IV期後半は槍先形尖頭器が量的に多くなっていくこと、前半の特徴とされる砂川型刃器技法がほとんど見られなくなり、ナイフ形石器の形態が多様化することを特徴としている。ナイフ形石器は小形の幾何形ナイフ形石器が多く見られるのも特徴の一つと言える。また前半はいわゆる在地系の凝灰岩などの石材を多用するのに対し、後半は黒曜石の使用が多く見られることも一つの特徴として挙げられている。

こうした編年研究は、その後も段階的把握として、段階 I～Xまでとして再検討されたが、相模野第IV期については、前半を段階VI、後半を段階VIIとし、そのまま踏襲された捉え方がされている。特に段階VIIは砂川型刃器技法の崩壊段階、ナイフ形石器文化の終末として設定されている。

これら編年研究の成果は、今現在も、変ることなく神奈川県内に限らず、南関東における研究の柱とされている。こうした編年を見返すたびに、当時の研究者の情熱、熱量がひしひしと伝わってくる感覚に陥るのは私だけだろうか。

県西部では前項でも取り上げられている通り、土壤の堆積が厚く、秦野市周辺ではローム上面まで2m～3mを測るのが常である。

さらに相模野第IV期の遺跡が包含されている深さまではさらに2m～4m掘り下げなければ到達しないという土壤の堆積環境となっている。このことは各遺跡（文化層）が分離された状態で真空パックされやすいというメリットがある一方、4m～7mを掘削するような開発行為自体がほとんどなく、当該期を対象とした調査が行われることもほとんど皆無であった。まして発掘調査によって発見される確率については言わずもがなであり、結果としてこれまで出土事例が積み上がってこなかった証左ともいえる。

しかし近年、新東名高速道路の新設工事等の大規模開発に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、これまで希薄であった神奈川県西部の旧石器時代遺跡の発見が相次いでいる。

相模野第IV期の検出事例では、秦野市蓑毛小林遺跡B 1層下部において前半のナイフ形石器の製作址を検出している。

本遺跡は2018年3月段階で未だ調査中であることから、詳細な報告は時を待たなければならないが、見学会や速報展示を通して情報が開示されている。

同遺跡では、相模野第IV期前半に帰属する文化層が調査範囲の東端で検出した。L 1 H層下部の石器群とは平面的には重複するような分布を見せるが、垂直方向には間層があり、それぞれの文化層は完全分離している。

相模野第IV期に限るわけではないが、こうした県西部における資料数の増大や土層観察記録数の蓄積を受

け、当プロジェクトでは県東部から相模野台地や伊勢原台地を抜け秦野までの県内の出土事例や土壤堆積状況の対比を行ない、県下の全容解明に向け注力している。

数年続くと予想される発掘ラッシュの中、引き続き対比作業を継続し、神奈川県西部から見た丹沢や箱根を越えた周辺地域を視野に検討を加えてみたい。
(三瓶裕司・大塚健一)

6. 相模野第V期

前半 蓼毛小林遺跡の興隆

新東名建設事業に伴う秦野市蓼毛小林遺跡(公益財団法人かながわ考古学財団編 2017b)では最集中地点500 m²から信州系の黒曜石と箱根系のガラス質黒色安山岩と黒曜石を素材とした254点の槍先形尖頭器と3万点を超える剥片・碎片類が出土している。L1H層下部層(Y-137-1・2より下位)出土の槍先形尖頭器を主体とする石器群は21,400calBP前後であり、大形のガラス質黒色安山岩製の製品は長さ8cm前後幅2~4cm、小形の黒曜石製とガラス質黒色安山岩製は、長さ3cm前後幅2cm未満と長幅比に幅があるが、中形のガラス質黒色安山岩製と黒曜石製の製品は長さ5cm前後幅2cm未満に収斂する。槍先形尖頭器の目的形態は微視的観察と接合作業によって明らかとなるが、刺突時の衝撃剥離による先端部の欠損品、あるいは被熱による赤化、白色化、ヒビ割れ等の痕跡を有する製品を含んでいる。遺跡は槍先形尖頭器の製作跡のみならず、移動回帰した当時の拠点集落の一端をも示している。

蓼毛小林遺跡石器群の全貌は出土品整理と報告書刊行に期待せざるを得ないが、県内では大和市月見野遺跡群の同時期出土点数を凌駕し、日本列島内でも有数の槍先形尖頭器石器群の大遺跡である。群馬県桐生市新里町の武井遺跡群は60年以上も継続調査する遺跡であり、複数時期を含むが蓼毛小林遺跡と同時期の遺跡である。保存地区を含む遺跡は6万m²、槍先形尖頭器1,330点、うち完形品420点、全体で20万点以上の石器類を出土する巨大遺跡(関口 2013)である。ただし、蓼毛小林遺跡と武井遺跡群の分布密度は総面積(10ha)・槍先形尖頭器(100 m²)で600点:3点・50点:2点となり、蓼毛小林遺跡の出土密度の高さを物語っている。

神奈川県内では、綾瀬市寺尾遺跡第II文化層では木葉形の両面加工・片面加工・周縁加工と各形態があり、凝灰岩・チャート・黒曜石など多くの石材種を使用している。寺尾よりやや上層から出土した清川村官ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第III文化層、藤沢市用田南原遺跡第II文化層は、箱根系ガラス質黒色安山岩製の剥片素材を搬入し、多様な形態の両面加工の槍先形尖頭器を製作している。

後半 細石刃石器群の出現

細石刃石器群は日本列島全域で出土し、相模野台地では、細石刃石器群はL1H層上部～L1S層から出土し、石材、細石刃の大きさ、細石刃石核を中心とする細石刃製作工程などの特徴が出土層位によって異なることが明らかとなっている(砂田 1994)。

L1H層上部から出土した綾瀬市吉岡遺跡群B区、藤沢市代官山遺跡第III文化層、横須賀市打木原遺跡、西富岡・向畑遺跡では伊豆柏崎を中心に箱根畑宿産の黒曜石製の小形角礫や分割剥片を石核素材として「代官山細石刃製作工程」の細石刃石核から長さ10mm余りの極小の細石刃を剥離している。伊勢原市西富岡・長竹遺跡では信州系黒曜石製細石刃石器群が、ホルンフェルス・安山岩製の下膨れ厚手の槍先形尖頭器、ホルンフェルス製の礫器が配石を伴っている(麻生 2016b)。礫面・層理面・分割面の非調整打面とした側面調整のみによる細石刃製作工程は伊豆箱根系黒曜石を素材としたが、新たに信州系が加わることとなった。

なお、吉岡遺跡群のAMS測定値16,860±160(Tka-11599)、16,490±250(Tka-11613)をIntCal13で算定する

と 20,750–19,290calBP であり、中央値 20,020calBP を測定する。

B 0 層下部の上柏屋・石倉中遺跡では、神津島産黒曜石製の細石刃・細石刃核を含む 3,500 点以上の関連石器が出土している。焼土を伴う大形配石遺構はこの時期の一端を顕している。

また、B 0 層下部の秦野市菖蒲平台遺跡ではガラス質流紋岩製の細石刃石器群が 2,000 点余り出土している。石核形態にとらわれない非調整打面の打面転位による細石刃石核で、17,600calBP が算出されている。

B 0 層から L 1 S 層下部では、サザランケ遺跡第Ⅱ文化層など信州系黒曜石を限定利用する時期から綾瀬市報恩寺遺跡のように神津島産黒曜石に凝灰岩やチャートなど在地系石材を利用する遺跡が加わる。L 1 S 層上位の大和市下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層や同市上和田城山遺跡第Ⅰ文化層では、凝灰岩など在地石材を中心利用する。また、非黒曜石製の細石刃石核の形態は下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層を除き角柱状の「野岳・休場型」となり、細石刃を含む石器群全体が徐々に大形化する。下鶴間長堀遺跡第Ⅰ文化層の細石刃石核は大形船底形態の「船野型」となる。これらの細石刃石器群は、西南日本一帯とも共通し、相模野台地の層位的変遷は他地域の変遷過程を明らかにする上でも重要な出土事例となっている。

縄文時代草創期の石器群

16,000 年前、日本列島では土器の登場とともに縄文時代草創期に移行する。同時期全遺跡で土器が出土するとは限らず、旧石器時代の石器製作を踏襲しながら主要利器が変遷する。

L 1 S 層上部からは槍先形尖頭器主体の石器群が出土し、大和市月見野遺跡群上野遺跡第 1 地点第Ⅱ文化層、同市長堀北遺跡第Ⅱ文化層では、槍先形尖頭器とともに細石刃・細石刃石核が出土する。細石刃石核は、従来の剥片剥離工程の石核依存形態とは全く異なり、両面調整の大形槍先形尖頭器状石器を長軸方向に分断して細石刃剥離の打面を作出する削片系細石刃石核である。北海道島から本州島東北地方に分布する北方系細石刃技術基盤に立脚する。

綾瀬市寺尾遺跡第Ⅰ文化層、同市吉岡遺跡群 A 区・同 C 区、座間市栗原中丸遺跡第Ⅰ文化層は、槍先形尖頭器の形態が石器群によって異なる。この時期長者久保神子柴文化と呼称する横断面三角形の大形打製石斧や小形刃部磨製石斧、大形槍先形尖頭器の出現と同時に消滅する。綾瀬市吉岡遺跡群 A 区では、大小石斧群・槍先形尖頭器を製作するが、出土層位、石器器種組成、石材種など検討すべき課題の多い時期である。蓑毛小林遺跡 L 1 H 層下部層出土地点の西北 160 m 西側の丘陵尾根上 L 1 S 層下部からガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器、東北貞岩製の搔削器が 900 点の剥片類と出土し、秦野市柳川竹上遺跡の標高 265 m 丘陵頂部から東北貞岩製の大形槍先形尖頭器が単独出土している。

なお、長堀北遺跡第Ⅱ文化層と大和市相模野 No. 149 遺跡では有舌尖頭器、吉岡遺跡群 C 区では石鏃の新器種が散見され初め、新たな石器群への交代錯綜する時代の到来である。

また、黒色土層最下部から横浜市花見山遺跡、同市長津田宮之前遺跡、伊勢原市三ノ宮・下谷戸遺跡など有舌尖頭器を主体とする石器群が多数発見され、隆起線文土器が共伴している。伊勢原市神成松遺跡第 5 地点では微隆起線文土器、ガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器、硬質細粒凝灰岩製の打製石斧等が出土し土器付着炭化物 3 点の中央値は 13,620 calBP を測り(野尻 2014)、北東 200 m の神成松第 9 地点から神子柴型打製石斧未成品が出土した(神奈川県教育委員会編 2017)。秦野市寺山中丸遺跡からは市内初の隆起線文土器を出土し、ガラス質黒色安山岩製の有舌尖頭器の製作跡が発見され、三廻部東耕地遺跡でも隆起線文土器無文部が出土している。この時期、槍先形尖頭器に有舌尖頭器や石鏃が組成し始める。

有舌尖頭器は、基部突出胴部長の「小瀬ヶ沢型」、基部胴部同等の「花見山型」である。神奈川県内では「花

見山型」が多数である。石材種は多摩丘陵の花見山遺跡や宮之前南遺跡では多摩川産チャート製を中心にガラス質黒色安山岩・流紋岩・珪質頁岩、丹沢南麓の三ノ宮・下谷戸遺跡では箱根産ガラス質黒色安山岩製など、在地石材を中心に利用する。

その後、爪形文土器を伴う大和市深見諏訪山遺跡第Ⅰ文化層では、有舌尖頭器は幅広の槍先形尖頭器とともに僅かとなり、先端部と基部が屈折し腸抉りは三角形鏃と共通する。

なお、秦野市戸川諏訪丸遺跡の漸移層上面からは厚手爪形文土器の同一個体破片30点、同一層序から箱根産黒曜石製の凹基三角形鏃1点、中粒凝灰岩製礫器3点を出土し、炭化物粒3片の中央値は12,600calBPを測定している。

(砂田佳弘)

おわりに

新東名高速道路、国道246号線バイパス建設と県道等のアクセス道路の建設に伴う本発掘調査において伊勢原・秦野地区ではかつてない大規模調査が始まり10年余を経過した。

この間、旧石器時代から近世に至るまで数多くの発掘調査が進捗し、とりわけ縄文時代草創期から旧石器時代の新たな遺跡が続々と検出されている。

伊勢原丘陵では大半の遺跡で旧石器時代の調査を実施し、第Ⅳ期前半の茂呂系ナイフ形石器再登場の時期と、第Ⅳ期後半の月見野期を中心に、第Ⅴ期後半の細石刃石器群の新たな遺跡が発見されている。秦野盆地では第Ⅴ期前半の蓑毛小林遺跡の成果が屈指で、質量ともに列島内有数の遺跡である。その他の地域でも同時期の石器群を小規模ながら検出している。

これまで、相模野台地を中心にはすすめられてきた旧石器時代の編年作業は相模川以西の伊勢原・秦野地区の新発見によって、従来不明であった石器群間の微視的変遷が地域テフラを鍵層として新たな編年構築が可能となろう。これまで以上に列島における石器群の編年作業をさらに推し進めるとともに日本標準の編年網作成を大いに期待するのである。

(砂田佳弘)

【引用・参考文献】

- 麻生順司 2008 『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡Ⅰ 発掘調査報告書—本文編—』 p.346 大和市No.199遺跡発掘調査団
- 織笠 昭 2001「相模野ナイフ形石器文化の終焉」『平成12年度 神奈川考古学会考古学講座』 神奈川県考古学会 pp.55-72
- 神奈川県教育委員会編 2008 『かながわの遺跡展2008・巡回展 発掘された石の道具—旧石器時代～弥生時代の石器・石製品—』 p.29 神奈川県教育委員会 *第1期・5期の内容は本書の編年に基づき改編した。
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2016「神奈川県における国府系ナイフ形石器群の様相」『研究紀要21 かながわの考古学』(公財)かながわ考古学財団 pp.1-10
- 栗原伸好・畠中俊明・大塚健一・井関文明、加藤学 1996「V～IV層下部の石器群～相模野台地の様相～」『石器文化研究』5 石器文化研究会 pp.25-48
- 鈴木次郎・矢島國雄 1978「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』 有斐閣 pp.154-182
- 諏訪間 順 1988「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」『神奈川考古』24 神奈川考古同人会 pp.1-30
- 高尾好之・原田有紀編 2011 『沼津市文化財調査報告100 井出丸山遺跡発掘調査報告書』 p.120 沼津市教育委員会
- 中田大人 2016 「日本旧石器時代の現代人的行動と交代劇」『現代思想』44-10 pp.150-164 青土社
- 村澤正弘編 1996 『大和市文化財調査報告書第63集 大和市No.202遺跡第1地点1～3次調査・大和市No.159遺跡』 p.58
大和市教育委員会